

# 戦前における中等教員社会の階層性Ⅲ

—校長の賃金格差を中心にして—

山 田 浩 之

## 1 問題の所在と方法

本稿の目的は戦前における中等学校長の賃金を明らかにし、その結果により中等教員社会に生じていた階層構造を検討することにある。

これまで筆者は戦前の中等教員社会に関する分析を行い、教員の学歴による分布状況と賃金の格差について検討を行ってきた<sup>1)</sup>。すでにその中で中等教員の学歴による賃金の格差についても明治45年と昭和12年を対象にした分析を行い、高等師範学校（以下高師と略記）卒業者が帝国大学（以下帝大と略記）卒業者の劣位に置かれていたことを明らかにした（山田1996, 2000）。しかしながらこれらの分析は明治後期と昭和期という大きく隔たった時点を対象にしたものにすぎない。そのためこの二時点間でどのような変化が生じていたのかを検討することはできなかった。

また山田(1996, 2000)で行った分析の限界は、それらが名士録を使ったものであるということにもある。教員や校長の学歴が明記された名士録が入手できなければ、それ以外の時点は分析できないことになる。

そこで本稿では帝大卒業者の同窓会ともいえる学士会の『会員氏名録』と高師の卒業者名簿を用いて分析を行い、それを明治45年と昭和12年の結果と比較することにした。各時点において用いた資料は明治45年が教育実成会編纂・

---

1) これまで筆者は山田(1992 a, 1992 b, 1993 a, 1996, 2000)などにより戦前における中等教員の階層構造についての検討を行ってきた。

発行『明治聖代教育家銘鑑第一編』明治45(1912)年(復刻版:日本図書センター, 1989年), 大正9年と昭和5年が学士会『会員氏名録』『東京高等師範学校一覧』『広島高等師範学校一覧』各大正9(1920)年度, 昭和5(1930)年度, そして昭和12年が『大衆人事録』第12版, 帝国秘密探偵社國勢協會, 昭和12(1937)年である。明治45年は山田(1996)において, 昭和12年は山田(2000)で分析に用いた資料である。これらの検討はそちらに譲りたい。

本稿で加えた資料は大正9年と昭和5年のものである。学士会は任意加入の団体であり, その名簿にすべての帝大卒業者が記載されているわけではない。しかし全学部 of 卒業者について分析が行え, しかも卒業者の職業が役職も含めて記載されていた。また両高師の学校一覧は卒業者の職業を網羅的に記載しており信頼性も比較的高いと考えられる。

さらに各年度に発行された『文部省年報』『全国師範学校に関する諸調査』『全国中学校に関する諸調査』『高等女学校に関する諸調査』を用いている<sup>2)</sup>。これらの資料により各学校の校長名を特定し, 各校長が在籍する諸学校の属性, すなわち各学校の設立年, 生徒数などを知ることができる。

以上のような資料によって特定された校長と学校の属性を各年度の『職員録』と対照させて校長の賃金を明らかにした。戦前の『職員録』には公立学校の教員名とその等級が記載されており, 各教員の等級を俸給表と照らすことでその給与を知ることができる。しかしそこに示された「等級」は戦前の公務員の地位である判任官と奏任官でその表記の仕方が異なり, またその基準となる俸給表も別であった。分析時点のなかには中等学校長を判任官と規定した時期があったが, 実際にはその多くが奏任待遇とされ別の俸給表が適用されていた。すなわち校長には判任官と奏任待遇の者が混在しており, 等級のみでは校長の格付けの比較は困難となる時点があった。そこで本分析では等級によって算出

2) 『全国師範学校に関する諸調査』『全国中学校に関する諸調査』『高等女学校に関する諸調査』はいずれも大空社による復刻版を用いた。なお明治45年は当該年度の『全国師範学校に関する諸調査』が発行されていないため, 師範学校の校長名などの特定は『文部省年報』で行った。

された各校長の年額の給与を使用することにした。

ただし本資料には年功加俸などの付加手当は記載されておらず、ここで使用した給与はいわば基本給とも言えるものである。そのため本分析で使用した賃金は当時の教員の賃金を低く評価していることになる。また『職員録』の性格上、私立校については俸給を明らかにできない。そのため本稿での分析は私立校を除外し、公立校のみを対象として行うことになる。このように『職員録』を利用した分析にもいくつか制約がある。しかし各教員の地位を比較するための指標としてはこの資料で十分であると判断し、『職員録』によって算出した各校長の給与を用いて分析を行った<sup>3)</sup>

以下では次節で学校種による給与の格差を学歴別に概観し、その後3節で学校の属性による給与の違いについて検討を行う。そして4節では教職経験年数の違いによる影響を検証するため年齢による給与の違いを明らかにする。このような分析を通じて中等教員内に生じていた学歴による地位の格差を検討したい。

## 2 学校種による格差

まず中学校長の給与全体を概観するため、表1には学校種と学歴により校長の平均給与を示した。この表により各分析年次別に中学校長の給与を検討しておこう。なおこの表に示した校長の給与はすべて年額である。また分析対象者の数が非常に少なくなる場合があるため、括弧内には分析対象者の人数を記している。

はじめに明治45年の全中学校長の給与を見てみよう。中学校長全体の平均給与は年額1,316.1円であり、月額にすると109.7円であった。当時の教員では師範学校教員の全国平均は月額45.3円、小学校教員は月額18.5円であっ

---

3) 校長の中には他学校などとの兼職者も多く含まれていた。そうした者は実際に得ていた給与の特定が難しく、また他の専任校長とは異なる規準で給与が定められていた者も含まれていた。そこで一律の規準で分析を行うため兼職者はすべて分析対象から除外した。

表1 学校種別中等学校長の学歴別平均給与の推移

		帝国大学	高等師範学校			その他	中等教育 以下	全 体
			全 体	東 京	広 島			
明治45年	師範学校	1,500.0( 2)	1,481.0( 42)	—	—	1,400.0( 2)	1,350.0( 2)	1,472.9( 48)
	中学校	1,369.5( 41)	1,283.3( 18)	—	—	1,269.2(13)	1,286.1(18)	1,321.1( 90)
	高等女学校	1,100.0( 5)	1,090.6( 16)	—	—	900.0( 1)	1,054.5(11)	1,074.2( 33)
	全 体	1,346.9( 48)	1,352.0( 76)	—	—	1,262.5(16)	1,208.1(31)	1,316.1(171)
大正9年	師範学校	1,371.4( 7)	1,467.9( 78)	1,477.6( 76)	1,100.0( 2)	—	—	1,460.0( 85)
	中学校	1,507.4( 95)	1,460.8( 79)	1,464.9( 77)	1,300.0( 2)	—	—	1,486.2(174)
	高等女学校	1,269.2( 13)	1,238.2( 89)	1,254.4( 79)	1,110.0( 10)	—	—	1,242.2(102)
	全 体	1,472.2(115)	1,382.5(246)	1,397.4(232)	1,135.7( 14)	—	—	1,411.1(361)
昭和5年	師範学校	2,741.7( 12)	2,726.7( 75)	2,767.8( 59)	2,575.0( 16)	—	—	2,728.7( 87)
	中学校	2,896.5( 86)	2,551.0(247)	2,602.4(166)	2,445.7( 81)	—	—	2,640.2(333)
	高等女学校	2,532.4( 34)	2,377.2(268)	2,424.7(162)	2,304.7(106)	—	—	2,394.7(302)
	全 体	2,788.6(132)	2,494.4(590)	2,553.2(387)	2,382.3(203)	—	—	2,548.2(722)
昭和12年	師範学校	2,745.7( 14)	2,616.7( 78)	—	—	2,415.0( 2)	—	2,631.6( 94)
	中学校	2,614.6( 67)	2,329.9(274)	—	—	2,162.9( 17)	2,312.5( 4)	2,374.6(362)
	高等女学校	2,386.7( 39)	2,183.9(316)	—	—	2,065.0( 32)	2,016.0( 15)	2,187.9(402)
	全 体	2,555.8(120)	2,294.3(668)	—	—	2,111.4( 51)	2,078.4( 19)	2,315.2(858)

注：表中の値は校長の給与（年額）を示す。また分析対象者の数が非常に少なくなる場合があるため、括弧内に分析対象者の人数を示した。以下の表も同様に表記している。

た<sup>4)</sup>したがって中等学校長の給与は中等教員の2倍以上、また小学校教員の約6倍とかなりの高額であったことがわかる。また明治44年の高等文官試験に合格した高等官の初任給が月額55円、銀行での大卒者の初任給が月額40円であったとされており<sup>5)</sup>、中等学校長はこれらのほぼ2倍の給与を得ていた。このように明治45年の中等学校長は高い給与により優遇されていたことがわかる。それでは中等学校長の給与にはどのような格差が生じていたのだろうか。ま

4) 師範学校教員の給与は『師範学校に関する諸調査』（復刻版：大空社）、小学校教員の給与は、『文部省年報』の当該年度による。以下の師範学校教員、小学校教員の給与はすべて同じ出所による。

5) 週刊朝日編(1987)、583頁、601頁による。以下の高等官、銀行員の初任給はすべて同じ出所による。

ず学校種別に見ておきたい。この表の学歴全体、すなわち最右欄を見ると師範学校長の平均給与がもっとも高い1,472.9円であり、その次が中学校長の1,321.1円、最後が高等女学校長の1,074.2円と、その差は200円前後であった。したがって師範学校を頂点として、中学校、高等女学校という学校種による明確な階層構造が形成されていたことになる。

次に学歴別に見てみよう。明治45年の最下行に示した中等学校長全体の給与では、もっとも平均給与が高かったのは高師卒業者であり、その額は1,352.0円であった。また帝大卒業者の平均給与も高師卒業者と同様に高く1,346.9円であった。これら両者の差はわずかなものでしかなく、帝大卒業者と高師卒業者の給与はほぼ同じ水準であったと考えられる。その下に来るのがその他の高等教育機関卒業者であり、最後が中等教育以下の学歴しか持たない者であった。したがって中等学校長全体を学歴で見れば、高師・帝大卒業者→その他の高等教育機関卒業者→中等教育以下の学歴しか持たない者という賃金による階層構造が生じていたことになる。

ところが学校種別に学歴による差を見てみると状況は少し異なり、帝大卒業者が高師卒業者よりも高い地位を占め、そして中等教育以下の学歴しか持たない者の地位がかなり高くなっていた。確かに師範学校長では中等学校長全体とほぼ同じ傾向が現れ、高師卒業者の給与が1,481.0円と中等教育以下の学歴しか持たない者の1,350.0円より100円以上も高くなっていた。しかし中学校と高等女学校の校長では、中等教育以下の学歴しか持たない者がかなり高い給与を得ていることがわかる。すなわち中学校では中等教育以下の学歴しか持たない者の給与は1,286.1円であり、これは高師卒業者の1,283.3円よりもわずかながら高くなっていた。また高等女学校長での中等教育以下の学歴しか持たない者の平均給与は1,054.5円であり、これは帝大や高師の卒業者とも大きく変わらなかった。つまり高師卒業者が全中等学校長内で帝大卒業者とほぼ同じ地位を占めていたのは、師範学校で高い給与を得ていた者が多かったためであった。中学校と高等女学校においては帝大卒業者がもっとも高い地位を占め、中

等教育以下の学歴しか持たない者と高師卒業者はほぼ同じ地位だったことになる。

大正9年になると中等学校長全体の平均給与は1,411.1円になり、月額にすると117円であった。山田(1992b)で指摘されているように、この年に俸給令が改正されるまで公立学校教員の給与は据え置かれたままであった。したがってこの年の校長の給与は明治45年からわずか100円程度上昇したのみであり、大正前期の好景気により実質価格は大きく低下していた。実際に高等官の初任給は大正7年には月額75円となり、中等学校長との給与格差は大きく縮まっていた。また銀行での大卒者の初任給は大正9年に月額45円から50円にすぎず、なお中等学校長が2倍以上の給与を得ていたことになる。しかし民間企業では好景気による給与の相対的な低下が臨時給与などで補われていたと考えられる。したがって民間企業の給与も中等学校長との格差は大きく縮小していたと推測されよう。

学校種別で大正9年における校長の給与を比較すると、明治45年とは異なり師範学校長の給与は1,460.0円と中学校長の給与1,486.2円を下回っていた。しかしその差はわずかに20円であり、この時期には師範学校長と中学校長の給与はほぼ同水準であったと言えよう。なお師範学校長の給与が中学校長の給与を下回ったのはこの大正9年のみであった。俸給令改正直前の特殊な事例であった可能性もある。

学歴別では帝大卒業者の平均給与が1,472.2円と高師卒業者の給与1382.5円を大きく引き離していた。広島高師卒業者はまだ数も少なく、そしてその年齢も低かったと考えられるから、帝大と東京高師の卒業者を比較すべきであろうが、それでも帝大卒業者全体の給与は東京高師卒業者の給与、1,397.4円を大きく上回っていたのである。

また学校種別に学歴と給与の関係をみても、師範学校でこそ帝大卒業者の給与1,371.4円は高師卒業生の1,467.9円よりもかなり低くなっていたが、中学校と高等女学校ではいずれも帝大卒業者の給与が高師卒業者よりも高くなって

いた。

このように大正9年には中学校の威信が上がるとともに、帝大卒業者が安定して高い給与を得るようになっていた。帝大卒業者が高師卒業者よりも高い地位を占める傾向が現れはじめていたと言える。

昭和5年になると全中学校長の給与は2,548.2円、月額にすると212.3円となった。大正9年の俸給令改正により中等教員の給与はほぼ倍増したが、この結果はそれを反映したものと言える。同時期の高等官の初任給は月額75円に据え置かれており銀行の初任給は70円であったとされるから、中学校長の給与はその3倍近いものであった。

学校種別に校長の給与を比較すると師範学校長が2,728.7円ともっとも高い給与を得ており、その次が中学校長の2,640.2円、そしてもっとも低かったのが高等女学校長の2,394.7円であった。師範学校長と高等女学校長との差は300円以上もあり、さらに明確な階層構造が学校種間で生じていたことがわかる。

学歴別では帝大卒業者の給与が2,788.6円であり、高師卒業者を圧倒していたことがわかる。高師卒業者の給与は2,494.4円にすぎず、帝大卒業者とは200円以上もの差が生じていた。また広島高師卒業者の給与はさらに低く2,382.3円にすぎなかった。これは帝大卒業者よりも400円以上低く、東京高師卒業者よりも200円近く低い給与であった。

学校種別に学歴と給与の関係をみても、こうした給与格差の構造はほとんど変わらない。師範学校でこそ東京高師卒業者の給与は2,767.8円と帝大卒業者の2,741.7円をわずかに上回っていたが、中学校、高等女学校ではいずれも帝大卒業者と東京高師卒業者の間には大きな差が生じていた。また広島高師卒業者はすべての学校種でもっとも低い給与となっていた。つまり昭和5年には帝大卒業者→東京高師卒業者→広島高師卒業者という学歴による階層構造が形成されていたことになる。なお広島高師卒業者はこの時期においても依然として年齢が低く、そのため給与が低くなっていたと考えることもできよう。年齢の

問題については4節で詳しく検証する。

昭和12年には全中学校長の給与は2,315.2円、月額にすると192.9円であった。昭和6年に再び俸給令が改正され中等教員の給与は減額された。それにもとまない校長の給与も昭和5年の水準よりもわずかに低下していた。それでも、昭和12年における師範学校教員給与の平均年額が1,358.5円、初等教員給与の平均年額が730.8円であったから、中学校長の給与は中等教員の約1.7倍、初等教員の約3.2倍になる。また高等官や銀行員の初任給は昭和5年と変わっていなかったため、わずかに差は縮小したものの、それでも中学校長とは大きな差が生じていたことになる。このように中学校長の給与は社会的にも高いものであり、戦前を通じて待遇面ではかなり恵まれていた。

学校種別に校長の給与を比較すると、昭和5年に見られた学校種間の階層構造がさらに明確になっていたことがわかる。師範学校長の給与は2,631.6円ともっとも高く、その次が中学校長の2,374.6円と約250円の差が生じていた。また高等女学校長の給与は2,187.9円であり、中学校長とは約200円、師範学校長とは約450円もの差が生じていた。

学歴別にみても階層構造はさらに明確になっていた。もっとも高い給与を得ていたのは帝大卒業者でありその給与は2,555.8円、以下高師卒業者が2,294.3円、その他の高等教育機関卒業者が2,111.4円、そして中等教育以下の学歴しか持たない者が2,078.4円と学歴に対応して平均給与は低下していた。帝大卒業者と高師卒業者の間には250円以上の差が生じており、帝大卒業者の給与が破格の高額であったことがわかる。山田(2000)で指摘しているようにこの時期の高師卒業者は量的に圧倒的な優位を保っていたが、給与面では帝大卒業者が中等教員のもっとも高い地位にいたことになる。これは学校種と学歴との関係でも同様であり、いずれの学校種においても帝大卒業者が高師卒業者を上回る給与を得ていた。すなわち校長の給与から見ればほぼ完全に帝大→高師→その他の高等教育機関卒業者→中等教育以下の学歴しか持たない者という階層構造が中等教員内で確立していたのである。



中等教育以下の学歴しか持たない者の給与は帝大の卒業者と比較すれば非常に低いものであった。しかし彼らは特に中学校において2,312.5円という高師卒業者と同じ水準の給与を、またその他の高等教育機関卒業者の2,162.9円より約150円も高い給与を得ていた。サンプル数が非常に少ないため、この結果のみによって中学校では中等教育以下の学歴しか持たない者がその他の高等教育機関卒業者よりも地位が高かったと結論づけることはできない。しかし高等教育学歴を持たなくても、校長にまで昇進した者の中には、その他の高等教育機関卒業者と同等、あるいはそれ以上の扱いを受けていた者がいたことは確かであろう。

### 3 学校の属性との関係

#### (1) 師範学校

次に学校の属性と校長の給与との関係について検討しよう。表2は師範学校長の在職校と賃金との関係を学歴別に示したものである。師範学校は各府県に男子校が1校から2校と女子校1校が設立されているのが普通であった。そこで本分析では師範学校を次の3種に分類した。すなわち各府県でもっとも早く設立された男子校を「第一師範」、二校目以降の男子校を「第二師範」、そして「女子師範」である。以下この分類に従って師範学校長の在職校と賃金との関係について検討する。

この表からわかるように学校の属性によって師範学校長の給与は大きく異なっていた。まず明治45年には第一師範学校長の平均給与は約1,516.0円であった。それが第二師範学校長、女子師範学校長と順に低下し、女子師範学校長の賃金は第一師範学校長よりも約100円安い1,416.7円となっていた。この傾向は大正9年以後も一貫しており、戦前には師範学校が学校の属性によって序列化され、第一師範→第二師範→女子師範という階層が形成されていたことになる。

それでは学歴別ではどのような差が生じていたのだろうか。先にも指摘した

表2 師範学校長の学校種別平均給与の推移

		第一師範学校	女子師範学校	第二師範学校	全 体
明治45年	帝 国 大 学	—	1,500.0( 2)	—	1,500.0( 2)
	高等師範学校	1,516.0(25)	1,415.4(13)	1,475.0( 4)	1,481.0(42)
	そ の 他	—	1,400.0( 2)	—	1,400.0( 2)
	中等教育以下	—	1,300.0( 1)	1,400.0( 1)	1,350.0( 2)
	全 体	1,516.0(25)	1,416.7(18)	1,460.0( 5)	1,472.9(48)
大正9年	帝 国 大 学	1,325.0( 4)	1,433.3( 3)	—	1,371.4( 7)
	高等師範学校全体	1,575.7(37)	1,356.3(32)	1,422.2( 9)	1,467.9(78)
	東 京	1,586.1(36)	1,367.7(31)	1,422.2( 9)	1,477.6(76)
	広 島	1,200.0( 1)	1,000.0( 1)	—	1,100.0( 2)
	全 体	1,551.2(41)	1,362.9(35)	1,422.2( 9)	1,460.0(85)
昭和5年	帝 国 大 学	2,975.0( 4)	2,628.6( 7)	2,600.0( 1)	2,741.7(12)
	高等師範学校全体	2,902.8(36)	2,554.8(31)	2,600.0( 8)	2,726.7(75)
	東 京	2,945.2(31)	2,556.5(23)	2,640.0( 5)	2,767.8(59)
	広 島	2,640.0( 5)	2,550.0( 8)	2,533.3( 3)	2,575.0(16)
	全 体	2,910.0(40)	2,568.4(38)	2,600.0( 9)	2,728.7(87)
昭和12年	帝 国 大 学	2,771.3( 8)	2,754.0( 5)	2,500.0( 1)	2,745.7(14)
	高等師範学校	2,672.7(37)	2,554.7(36)	2,648.0( 5)	2,616.7(78)
	そ の 他	—	2,415.0( 2)	—	2,415.0( 2)
	中等教育以下	—	—	—	—
	全 体	2,690.2(45)	2,571.4(43)	2,623.3( 6)	2,631.6(94)

ように師範学校長のほとんどが高師卒業者であり、量的に見れば、高師卒業者が師範学校をほぼ支配していたかのように見える。確かに師範学校での高師卒業者の賃金は非常に高く、第一師範学校長である高師卒業者の賃金は1,516.0円ともっとも高くなっていた。しかしすべての学歴の者がいる女子師範学校での給与の違いを見ると、必ずしも高師卒業者優位とは言えなくなってくる。女子師範学校長でもっとも給与が高かったのは帝大卒業者であり、その給与は1,500.0円であった。帝大卒業者はもっとも給与の安い女子師範にしながら、第一師範学校に在職する高師卒業者に迫る給与を得ていたことになる。したがっ

て明治45年の師範学校では、量的には高師卒業者が圧倒的優位に立っていたが、給与から見ると帝大卒業者も高師卒業者に迫る地位を得ていたことになる。

ところが大正9年には、帝大卒業者の第一師範学校での給与は1,325.0円と高師卒業者の1,575.7円よりも大きく低下する。女子師範学校でこそ帝大卒業者は1,433.3円と最高の給与を得ていたが、それは第一師範学校の高師卒業者よりも150円近く低いものであった。

先の全中学校長に関する分析の結果からもわかるように、大正9年頃は師範学校における高師卒業者の地位が非常に高まっていたものと考えられる。高師卒業者はたんに師範学校長を量的に寡占したのみでなく、給与でも高い地位を得ていたのである。

しかし昭和5年になると高師卒業者と帝大卒業者の地位が逆転する。帝大卒業者は第一師範学校、女子師範学校でそれぞれ2,975.0円、2,628.6円と最高の給与を得るようになった。とくに女子師範学校で得ていた給与は東京高師卒業者が第二師範学校で得ていた2,640.0円よりも高いものであった。また広島高師卒業者は女子師範学校でこそ2,550.0円と東京高師卒業者と大きな違いは生じていなかったが、第一師範学校では帝大卒業者、東京高師卒業者のいずれとも300円以上の差が生じていた。つまり師範学校の属性別に見ても広島高師卒業者は帝大卒業者と東京高師卒業者の下位に甘んじていたのである。

さらに昭和12年になると帝大卒業者は第一師範学校で2,771.3円、威信の低かった女子師範学校でも2,754.0円と非常に高額の給与を得るようになった。第二師範学校に在職していた帝大卒業者は1名にすぎなかったため、それと比較することは困難だが、帝大卒業者は師範学校の属性にかかわらず高額の給与を得ていたと言えるだろう。つまり師範学校の属性別に見ても昭和期には帝大卒業者が高師卒業者よりも高い地位を得ていたことになる。

## (2) 中学校

中学校長については表3に示したように学校規模別に学歴と給与との関係を

検討した。まず全中学校長の給与と学校規模との関係を見ると一貫して大規模校で校長になっていた者の給与が高く、明治45年には大規模校で1,393.9円、小規模校で1,260.2円であり、昭和12年になると大規模校で2,547.3円、小規模校で2,161.3円とその差はさらに広がっていた。これは大規模校の多くが都市部に作られた伝統校であり「一中」と呼ばれていた学校に代表される威信の高い学校であったことによると考えられる。すなわち在職校の威信が校長の給

表3 中学校長の在職学校規模別平均給与の推移

		大規模	小規模	全 体
明治45年	帝 国 大 学	1,421.4( 22)	1,315.0( 22)	1,369.5( 44)
	高 等 師 範 学 校	1,380.0( 7)	1,246.2( 14)	1,283.3( 21)
	そ の 他	1,300.0( 7)	1,242.9( 7)	1,269.2( 14)
	中 等 教 育 以 下	1,400.0( 11)	1,172.2( 12)	1,286.1( 23)
	全 体	1,393.9( 47)	1,260.2( 55)	1,321.1(102)
大正9年	帝 国 大 学	1,576.4( 55)	1,412.5( 40)	1,507.4( 95)
	高 等 師 範 学 校 全 体	1,634.5( 29)	1,360.0( 50)	1,460.8( 79)
	東 京	1,650.0( 28)	1,359.2( 49)	1,464.9( 77)
	広 島	1,200.0( 1)	1,400.0( 1)	1,300.0( 2)
	全 体	1,596.4( 84)	1,383.3( 90)	1,486.2(174)
昭和5年	帝 国 大 学	3,020.3( 64)	2,536.4( 22)	2,896.5( 86)
	高 等 師 範 学 校 全 体	2,669.6(125)	2,429.5(122)	2,551.0(247)
	東 京	2,747.7( 88)	2,438.5( 78)	2,602.4(166)
	広 島	2,483.8( 37)	2,413.6( 44)	2,445.7( 81)
	全 体	2,788.4(189)	2,445.8(144)	2,640.2(333)
昭和12年	帝 国 大 学	2,814.7( 47)	2,144.5( 20)	2,614.6( 67)
	高 等 師 範 学 校	2,470.1(144)	2,174.5(130)	2,329.9(274)
	そ の 他	2,385.7( 7)	2,007.0( 10)	2,162.9( 17)
	中 等 教 育 以 下	2,385.0( 2)	2,240.0( 2)	2,312.5( 4)
	全 体	2,547.3(200)	2,161.3(162)	2,374.6(362)

注：表中の学校規模は生徒数によって分類し、「大規模」は明治45年、大正9年は500名、昭和5年は600名、昭和12年は650名を超えるものとし、それ以外を「小規模」とした。

与に反映していたのであろう。しかも学校規模による給与の差は昭和期になって急激に拡大していた。

学歴別では明治45年、大正9年には帝大と高師の卒業者の間に大きな差は生じていなかった。しかし昭和5年には特徴的な変化が生じていた。それは大規模校で学歴による給与の格差が拡大されていたことである。昭和5年の大規模校では帝大卒業者の給与は3,020.3円と3,000円を超えていたが高師卒業者は2,669.6円にすぎず、その差は300円以上もあった。ところが小規模校では帝大卒業者の給与は2,536.4円であったが高師卒業者は2,429.5円であり、その差は100円程度に縮小していた。

同様の関係は東京高師と広島高師の卒業者にも見られた。大規模校での東京高師卒業者の給与は2,747.7円であったが広島高師卒業者は2,483.8円と250円以上も離れていた。しかし小規模校での東京高師卒業者の給与は2,438.5円、広島高師卒業者は2,413.6円でありほぼ同じ水準になっていた。

このことは小規模校では高師卒業者も帝大卒業者に迫るほどの地位を確保できたが、大規模校では高師卒業者が帝大卒業者に太刀打ちできなかったことを示している。威信の高い大規模中学校では帝大卒業者がとくに優遇され、高給で校長として迎えられていたことが推測される。これは東京高師と広島高師の卒業者についても同様であろう。広島高師卒業者は小規模校では東京高師卒業者と同様の地位を確保することができた。しかし大規模校ではたとえ校長になったとしても東京高師卒業者ほどの地位を得ることはできなかった。したがって中学校ではとくに大規模校で帝大→東京高師→広島高師という階層が形成されていたことになる。

昭和12年になってもこうした帝大と高師の卒業者の関係は同様であった。大規模校での帝大卒業者の給与は2,814.7円と高師卒業者の2,470.1円を圧倒していた。しかし小規模校では帝大卒業者の給与である2,144.5円をわずかながら上回る2,174.5円を高師卒業者が得ていた。小規模校での違いはわずかなものにすぎず、両者はほぼ同水準であったと言えよう。つまり昭和12年にも帝大

卒業者はとくに大規模校で優遇されていたのである。

### (3) 高等女学校

最後に表4により高等女学校長の平均給与を学校の属性との関係で比較しておこう。高等女学校に現れた学校の属性との関係はほぼ中学校と同様であり、大規模校の校長は小規模校の校長よりも高い給与を得ていた。たとえば明治45

表4 高等女学校長の在職学校規模別平均給与の推移

		大規模	小規模	全 体
明治45年	帝 国 大 学	1,100.0( 1)	1,100.0( 4)	1,100.0( 5)
	高 等 師 範 学 校	1,166.7( 9)	992.9( 7)	1,090.6( 16)
	そ の 他	—	900.0( 1)	900.0( 1)
	中 等 教 育 以 下	1,120.0( 5)	1,000.0( 6)	1,054.5( 11)
	全 体	1,146.7( 15)	1,013.9( 18)	1,074.2( 33)
大正9年	帝 国 大 学	1,383.3( 6)	1,171.4( 7)	1,269.2( 13)
	高 等 師 範 学 校 全 体	1,300.0( 53)	1,147.2( 36)	1,238.2( 89)
	東 京	1,314.6( 48)	1,161.3( 31)	1,254.4( 79)
	広 島	1,160.0( 5)	1,060.0( 5)	1,110.0( 10)
	全 体	1,308.5( 59)	1,151.2( 43)	1,242.2(102)
昭和5年	帝 国 大 学	2,673.9( 23)	2,236.4( 11)	2,532.4( 34)
	高 等 師 範 学 校 全 体	2,455.5(164)	2,253.8(104)	2,377.2(268)
	東 京	2,481.8(110)	2,303.8( 52)	2,424.7(162)
	広 島	2,401.9( 54)	2,203.8( 52)	2,304.7(106)
	全 体	2,482.4(187)	2,252.2(115)	2,394.7(302)
昭和12年	帝 国 大 学	2,550.7( 27)	2,017.5( 12)	2,386.7( 39)
	高 等 師 範 学 校	2,325.4(151)	2,054.5(165)	2,183.9(316)
	そ の 他	2,233.3( 12)	1,964.0( 20)	2,065.0( 32)
	中 等 教 育 以 下	2,190.0( 5)	1,929.0( 10)	2,016.0( 15)
	全 体	2,347.4(195)	2,037.5(207)	2,187.9(402)

注：表中の学校規模は生徒数によって分類し、「大規模」とは明治45年は400名、大正9年は350名、昭和5年は380名、昭和12年は450名を超えるものとし、それ以外を「小規模」とした。

年の全高等女学校長では大規模校での給与が1,146.7円、小規模校では1,013.9円と100円以上の差が生じていた。こうした関係は大正9年以後も同じであり、昭和12年にも全高等女学校長の大規模校での給与は2,347.4円、小規模校では2,037.5円と300円以上の差が生じていた。

また学歴間の関係もほぼ中学校と同様であり、大正9年までは学歴による大きな違いは生じていなかったが、昭和5年以降、大規模校で学歴による格差が見られるようになる。昭和5年における帝大、東京高師、広島高師の卒業者の給与はそれぞれ2,673.9円、2,481.8円、2,401.9円であり、いずれも200円前後の差が生じていた。

すなわち高等女学校においても、昭和期以降、中学校と同様に帝大卒業者を頂点とする学歴による階層構造が大規模校を中心にして生じていたのである。

## 4 年齢との関係

### (1) 年齢と学歴

前節まで中等教員の学歴と給与の関係を検討し、給与から見れば帝大卒業者の地位がもっとも高かったことが明らかにされた。しかしここで生じていた差は彼らの年齢やキャリアの差によって生じたものかもしれない。すなわち帝大卒業者の給与の高さは彼らに高年齢者層の比率が高いためであり、その逆に高師卒業者は若年者層の比率が高いため給与が低くなっていたと考えることもできる。とくに広島高師卒業者が昭和5年において低い給与に甘んじていたのも彼らの年齢が帝大や東京高師の卒業者よりも低かったためかもしれない。

そこで以下では生年、または学校卒業年による給与の格差を比較しておきたい。なお以下の分析は分析対象者が二分されるように、明治45年と昭和12年については、それぞれ1865年、1887年までに生まれた者を高年齢者と、大正9年と昭和5年については、それぞれ1900年、1908年までに帝大、高師を卒業した者を高年齢者とし、その他の者を低年齢者とする<sup>9)</sup>

表5には師範学校長の生年別平均給与の推移を学歴別に示した。大正9年ま

表5 師範学校長の生年別平均給与の推移

		高年齢	低年齢	全 体
明治45年	帝 国 大 学	—	1,500.0( 2)	1,500.0( 2)
	高 等 師 範 学 校	1,528.6(21)	1,430.0(20)	1,480.5(41)
	そ の 他	1,400.0( 2)	—	1,400.0( 2)
	中 等 教 育 以 下	—	1,350.0( 2)	1,350.0( 2)
	全 体	1,517.4(23)	1,429.2(24)	1,472.3(47)
大正9年	帝 国 大 学	1,600.0( 1)	1,333.3( 6)	1,371.4( 7)
	高 等 師 範 学 校 全 体	1,627.5(40)	1,300.0(38)	1,467.9(78)
	東 京	1,627.5(40)	1,311.1(36)	1,477.6(76)
	広 島	—	1,100.0( 2)	1,100.0( 2)
	全 体	1,626.8(41)	1,304.5(44)	1,460.0(85)
昭和5年	帝 国 大 学	2,950.0( 6)	2,533.3( 6)	2,741.7(12)
	高 等 師 範 学 校 全 体	2,798.1(54)	2,542.9(21)	2,726.7(75)
	東 京	2,827.1(48)	2,509.1(11)	2,767.8(59)
	広 島	2,566.7( 6)	2,580.0(10)	2,575.0(16)
	全 体	2,813.3(60)	2,540.7(27)	2,728.7(87)
昭和12年	帝 国 大 学	3,040.0( 6)	2,490.0( 7)	2,743.8(13)
	高 等 師 範 学 校	2,733.5(40)	2,525.4(24)	2,655.5(64)
	そ の 他	2,500.0( 1)	2,330.0( 1)	2,415.0( 2)
	中 等 教 育 以 下	—	—	—
	全 体	2,767.7(47)	2,511.6(32)	2,663.9(79)

では同世代内における学歴による給与の格差はそれほど大きなものではなかった。しかし昭和5年以降、とくに高年齢者に明確な違いが生じていた。昭和5年における高年齢者では帝大卒業者の給与が2,950.0円であったのに対し高師卒

6) ここでの分析でもっとも望ましいのは在職年数を用いることであろう。しかし在職年数ではなく生年と卒業年を用いたのは次の理由による。本分析で使用した名士録と卒業生名簿のいずれも具体的な経歴をすべて明らかにすることはできなかった。中等教員に就職した年度は名士録にも明記されていない場合が多くなっていた。そこで本分析では同年齢集団、および同世代の給与の差を比較することでキャリアの差を明らかにできると考え生年と卒業年を用いた。



業者は2,798.1円であった。また東京高師と広島高師の卒業者でも高年齢者には大きな格差が生じており、東京高師卒業者の給与が2,827.1円であったのに対し広島高師卒業者は2,566.7円にすぎなかった。

その一方で低年齢者ではそのような大きな格差は見られない。むしろ低年齢者中もっとも高い給与を得ていたのは広島高師卒業者でありその給与は2,580.0円であった。しかし最低の東京高師卒業者でも給与は2,509.1円とその差はわずかなものであった。したがって低年齢者では給与はほぼ横並びであったと言って良いだろう。

こうした傾向は昭和12年においても同じであった。高年齢者における給与の格差はさらに広がり帝大卒業者は3,040.0円、高師卒業者は2,733.5円と300円以上の違いが生じていた。その一方で低年齢者における差は帝大と高師の卒業者の間にはほとんど生じていなかった。

つまり師範学校においては、大正期まで年齢別にみても中等教員内における給与の格差はあまり生じていなかったことになる。しかし昭和期以降とくに高年齢者で帝大卒業者は高師卒業者よりも高い給与を得るようになっていたのである。

次に表6には中学校長の生年別平均給与の推移を学歴別に示している。中学校ではいずれの世代、そして分析年次においても帝大卒業者の給与がもっとも高くなっていた。すでに明治45年には高年齢者中の帝大卒業者の給与は1,415.0円であり高師卒業者の給与1,318.2円とは約100円の格差が生じていた。また低年齢者においても帝大卒業者の給与が1,356.7円であったのに対し高師卒業者は1,228.6円と100円以上の格差になっていた。

こうした帝大卒業者と高師卒業者の差がもっとも大きくなるのは昭和5年であり、高年齢者で帝大卒業者の給与が3,114.9円であったのに対し、高師卒業者は2,676.8円と500円近い差が生じていた。また低年齢者でも同様に帝大卒業者の給与が2,633.3円であったのに対し、高師卒業者の給与は2,422.1円と200円以上の格差となっていた。つまり世代にかかわらず、帝大卒業者は中学校

表6 中学校長の生年別平均給与の推移

		高年齢	低年齢	全 体
明治45年	帝 国 大 学	1,415.0( 10)	1,356.7( 30)	1,371.3( 40)
	高 等 師 範 学 校	1,318.2( 11)	1,228.6( 7)	1,283.3( 18)
	そ の 他	1,250.0( 8)	1,300.0( 4)	1,266.7( 12)
	中 等 教 育 以 下	1,283.3( 12)	1,291.7( 6)	1,286.1( 18)
	全 体	1,318.3( 41)	1,324.5( 47)	1,321.6( 88)
大正9年	帝 国 大 学	1,684.4( 32)	1,417.5( 63)	1,507.4( 95)
	高 等 師 範 学 校 全 体	1,550.0( 36)	1,386.0( 43)	1,460.8( 79)
	東 京	1,550.0( 36)	1,390.2( 41)	1,464.9( 77)
	広 島	—	1,300.0( 2)	1,300.0( 2)
	全 体	1,613.2( 68)	1,404.7(106)	1,486.2(174)
昭和5年	帝 国 大 学	3,114.9( 47)	2,633.3( 39)	2,896.5( 86)
	高 等 師 範 学 校 全 体	2,676.8(125)	2,422.1(122)	2,551.0(247)
	東 京	2,705.0(100)	2,447.0( 66)	2,602.4(166)
	広 島	2,564.0( 25)	2,392.9( 56)	2,445.7( 81)
	全 体	2,796.5(172)	2,473.3(161)	2,640.2(333)
昭和12年	帝 国 大 学	2,951.3( 24)	2,372.6( 27)	2,644.9( 51)
	高 等 師 範 学 校	2,657.5( 40)	2,308.0( 83)	2,421.6(123)
	そ の 他	2,346.0( 5)	2,017.1( 7)	2,154.2( 12)
	中 等 教 育 以 下	2,460.0( 2)	2,165.0( 2)	2,312.5( 4)
	全 体	2,729.3( 71)	2,303.1(119)	2,462.4(190)

で高い地位を得ていたのである。そしてその格差は高師卒業者が帝大卒業者を量的に圧倒する昭和期に入ってさらに広がっていた。

また高師卒業者内でも格差が生じており東京高師卒業者が広島高師卒業者よりも世代にかかわらず高い給与を得ていた。すなわち昭和5年の高年齢者では東京高師卒業者の給与が2,705.0円、広島高師卒業者が2,564.0円であり、低年齢者でも東京高師卒業者の給与が2,447.0円、広島高師卒業者が2,392.9円といずれも東京高師卒業者の給与が高くなっていた。

このように中学校内で帝大と高師の卒業者に生じていた給与の格差は世代に

よるものではなかった。帝大卒業者を頂点とする厳然とした階層構造が明治期から昭和期を通じて中学校内に存在していたのである。

さらに高等女学校についても分析を行った結果、中学校と同様に帝大卒業者が世代にかかわらず高い給与を得ていたという結果を得た。したがって高等女学校においても帝大と高師の卒業者に生じていた給与の格差は世代によるものではなかったことになる。ここにも帝大卒業者を頂点とする明確な階層構造が昭和期になって現れていたのである。

## (2) 給与格差の生成過程

昭和5年における校長の給与をみると広島高師卒業者の給与は世代にかかわらず東京高師卒業者よりも低くなっていた。これは分析の都合上世代を二分類した影響によるものと考えられる<sup>7)</sup>。昭和5年に広島高師卒業者が高年齢者に占めた比率が低かったために異なる世代を比較してしまった可能性があるろう。

そこで表7では世代を三分類して学歴による平均給与の格差を算出した。なお世代は1905年までの卒業者を「高年齢者」、1909年までの卒業者を「中年齢者」、そして1910年以後の卒業者を「低年齢者」と呼ぶことにする。

この表からわかるように世代を三分類すると広島高師卒業者からは高年齢者

表7 昭和5年における中等学校長の生年別平均給与の推移—年齢3分類

	高年齢	中年齢	低年齢	全 体
帝 国 大 学	3,080.4( 46)	2,745.7( 35)	2,554.9( 51)	2,788.6(132)
高等師範学校全体	2,733.5(158)	2,482.1(195)	2,345.1(237)	2,494.4(590)
東 京	2,733.5(158)	2,496.3(107)	2,369.7(122)	2,553.2(387)
広 島	—	2,464.8( 88)	2,319.1(115)	2,382.3(203)
全 体	2,811.8(204)	2,522.2(230)	2,382.3(288)	2,548.2(722)

7) 世代を二分類にしたのは明治45年の資料などで三分類すると分析対象者が非常に少なくなってしまうためである。時系列で比較する場合には分析の基準を少ない方に揃えざるをえなかった。

がいなくなる。そして中年齢者と低年齢者で東京高師と広島高師を比較すればわずかに東京高師卒業者の給与が高いにすぎず、東京高師と広島高師の卒業者には平均給与の格差は生じていなかった。

このように高師卒業者の給与は東京高師と広島高師という学歴にかかわらずほぼ一定であった。つまり高師内には給与による地位の格差は存在していなかったことになる。

その一方で注目すべきは帝大と高師の卒業者に生じていた給与の格差である。帝大卒業者の給与はすでに低年齢者で2,554.9円と高師卒業者の2,345.1円を209.8円も上回っていた。この格差は世代が上がるとさらに広がっていた。帝大と高師の卒業者に生じていた給与の差は中年齢で263.7円、そして高年齢では346.9円にまで拡大していた。さらに中年齢の帝大卒業者の給与である2,745.7円は、高年齢の高師卒業者の給与である2,733.5円を上回るものであった。すなわち帝大卒業者は中年齢に達した時点ですでに高年齢の高師卒業者の給与を超えていたのである。

このように帝大と高師の卒業者に生じていた格差は歴然としたものであるばかりでなく、両者の昇給の速度も大きく異なっていたことがわかる。ではこのような昇給速度の違いはどのようにして形成されたのだろうか。

戦前の中等学校長の権限は非常に強いものであった。そうした校長の強い権限を背景にして各学校の校長は「優良」な教員を集めるために高給を提示して転任を求めているとされている。その様子がある高師卒業者は次のように述べている。

実は当時の連中は、むしろ遠方の好きな所へ行ったものです。全国を股にかけて歩いたと言った方が当たるでしょう。転任するたびに月給が上がるということも魅力だったかも知れません。

六十年も前には、中等学校の教員で、高師や大学を出た者は少なかったものですから、教員の引抜きが随分激しく行われたようでした、私なども

一年に二・三度は必ず転任の勧誘がありました。(記念誌『岡山尚志』編集委員会 1989, 16 頁)

また、大正 11 年の山口県議会においても、中等教員の不足により「優良教員の争奪を免れず、高給をもって迎える方が勝つという実情になっている」とされ、転任によって給与が急速に上昇していたことも指摘されている(山口県議会事務局 1958, 191 頁)。

このようにして各学校からさかんに転任の勧誘を受けた帝大と高師の卒業生の給与は他の学歴の者よりも急速に上昇していた。なかでも帝大卒業者に対する需要は高く、とくに高給で転任の誘いを受けていたのである。その結果帝大卒業者の昇給速度は際だって速くなることになった。このことが戦前の中等教員内における学歴による待遇の格差、すなわちその階層構造の形成を助長した要因の一つとなっていたのであろう。

## 5 結 果 と 考 察

以上、戦前における中学校長の給与と学歴の関係について検討を行った。本稿での結果は以下の 3 点にまとめられるだろう。

- 1) 明治期から大正期にかけては師範学校で高師卒業者が高い給与を、帝大卒業者が中学校と高等女学校で高い給与を得ていたがその格差は大きなものではなかった。ところが昭和期になると学歴による階層構造が明確になり、帝大卒業者の給与は高師卒業者を大きく引き離すようになった。昭和期になって帝大→高師→その他の高等教育機関卒業者→中等教育以下の学歴しか持たない者という階層構造が中等教員内で確立した。
- 2) 学校の属性別では昭和期以降、帝大卒業者が大規模中学校、高等女学校で高師卒業者よりも高い給与を得るようになった。また師範学校においても学校の属性に拘らず帝大卒業者が高師卒業者よりも高い給与を得ていた。すなわち昭和期には帝大卒業者が威信の高い学校の校長となり、そこで高い地位

を得ていた。

- 3) 年齢との関係ではほぼ一貫して世代にかかわらず帝大卒業者が高い給与を得ており、それは昭和期に入ってからいっそう顕著になっていた。また低年齢者では帝大と高師の卒業者に生じていた格差は小さくなっていたが、高年齢者では非常に大きくなっていた。またこうした年齢による給与の格差は帝大卒業者が請われて転職を繰り返すことで生じていた。

昭和期以降、高師卒業者は師範学校、中学校、高等女学校いずれの校長においても量的に帝大卒業者を圧倒していた(山田 1993 a, 2000)。しかし本分析で明らかにしたように中等教員内における地位を給与で見れば帝大卒業者が高師卒業者を上回っていた。すなわち量的な分布と教員内での地位が異なっていたことになる。このような結果からたとえば高師卒業者の学閥が強かったのは給与面で優位に立っていた帝大卒業者に対抗するためであったという仮説を導くことができよう。しかしながら本分析の結果のみでは中等教員の学閥形成過程まで明らかにすることはできない。今後さらに帝大と高師の卒業者の関係について検討を行い戦前の中等教員社会に生じていた階層構造がもたらした影響について検討する必要がある。

#### 参 考 文 献

- 記念誌『岡山尚志』編集委員会編 1989『岡山尚志』尚志会岡山県支部。  
週刊朝日編 1987『値段の明治大正昭和風俗史(上)』朝日新聞社。  
山口県議会事務局 1958『山口県会史 自大正十年至昭和五年』山口県議会。  
山田浩之 1992 a「広島高等師範学校入学者の社会的属性—大正9年から昭和12年を中心に—」『広島大学教育学部紀要』第40号。  
山田浩之 1992 b「戦前における中等教員社会の階層性—学歴による給与の格差を中心として」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第50巻, 東洋館出版社。  
山田浩之 1993 a「戦前における中等教員社会の階層性II—帝大・高師卒業者による占有率の全国分布を中心に—」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第一部第38巻。  
山田浩之 1993 b「旧制中等学校教員のリクルート—帝国大学文学部卒業生を中心に—」『松山大学論集』第5巻第5号。  
山田浩之 1996「明治45年における中学校長の学歴構成」『松山大学論集』第8巻第1号。

山田浩之 2000「戦前における中等学校長の学歴構成—昭和12年の学歴による階層構造を中心に—」, 日本教育社会学会編『教育社会学研究』第66集, 東洋館出版社。

附記：本稿は平成12年度松山大学特別助成の成果である。記して感謝の意を表したい。